

米国のファストフード店で 見かけた「施し」

「2番目は大切よね♡」。何を意味するかは、読んでからのお楽しみ。

さて、米国に着いて1週間、そろそろ92歳の日系2世のスーが作る家庭料理も飽きてきたので、私の大好きメキシカンでも食べようかなと考えていた。やはり元仏教徒・日本人の教えを学んだ真髓である以心伝心なのか、カソリックのスーがランチにメキシカンのタコを食べたいと言うので近所のファスト・フードチェーンのタコベルに行くことになった。お昼前の早い時間だったのであまり込んでいない店内に入り、オーダーを済ませ2人で席に座り待っていると、**不思議ちゃん系老人**がラインに並んでいるお客と少し離れて様子を窺っていた。

ん？ BH（ビミヨー・ホームレス）かな？ と思わせるその老人が客のいないカウンター越しにいる女性店員に片手を上げた。どうもお互い顔見知りの様だ。BH老人は、すまんね〜ポーズで30秒くらい待つと、店員はどう考えてもメニューにない簡単な食事とドリンク・カップをその老人に差し出した。お恵みを取っていただいた老人はそれらを手に取り、何食わぬ顔で店を出てどこかに

去って行った。カウンター越しの店員はその後も素知らぬ顔でメキシカンを話し接客を続けていた。周りの客もいつものことと理解しているようで、テーブルに座っている客も嫌な顔もしないで平然としていた。これには米国社会に余裕を感じた。貧しい社会は貧しい人たちに富を与えることはできないが、豊かな社会は富の再配分が可能のようだ。

お客が「ビッグマックを100個」とオーダーして、店員が「店内ご利用ですか？」と聞くのはマニュアルだから仕方ないが、このような場合、マニュアルはどうだろうか？ 米国ではなく日本での話だ。もし対応マニュアルがなかったら、日本はやはりまだ貧しい国だと言うことになるかもしれない。

そう言えばファスト・フードにはこんな思い出がある。私が16歳の時、ハワイのマックでオーダーした時に「to go? or here?」と聞かれ意味が分からなかった。いったいto goってなんだ？ 後でテイクアウトの意

日系米国人の教え

Vol.41



宮井能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに粟50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

味だと知った時には将来の金髪・ブルーアイとの出会いに備え、使えるイングリッシュの大切さを楽しみ組みと理解する出来事だった。それにしてもすごいと思いませんか？ 92歳でタコのファスト・フード店に行きたいなんてこと言うおばあちゃん。うどんやそばがだめだとは言っていない。年を取ったらあっさりした物が食べたいなんて体がシワクチャになるのが当たり

オレにも 言わせる!

北海道長沼発 ヒール宮井の憎まれ口通信

前だ！なんて余裕をカマシテいたら、楽しみなんてものがなくなってしまう。和洋折衷なんでもござれの精神が長生きの秘訣なのだろうか。

その後ランチが無事終了し、おかわり自由なドリンク・カップにダイエット・コークを入れて北海道だと初夏を思わせるサザンカリフォルニアの乾いた空気からのどを潤しながらスーの自宅に戻ることになった。

スーは用事があると言って2軒となりのナカムラさんの家に行くと言ったので、ついて行くことにした。

このナカムラさんの家には今までに数回お邪魔しているのに、変に気後れすることはなかったが、やはり日系3世とは言っても米国人には違いないので、私の方から不必要に日本の話を持ち出すことはなかった。

お互い米国人であつてもスーは1984年放送のNHK大河ドラマ『山河燃ゆ』の松本幸四郎が演じる実在した主人公、**天羽賢治**と同じ羅府新報の同僚であつたので戦前、戦中、戦後のマイノリティーとしての日系人の立場を肌身で知っている。スーは多くの教育を日本の岩国で受けたので学校の成績が良ければそれはそれで問題なかったが、スーのご主人ヘリーをはじめとする多くの2世は1930年代・大恐慌時代の米国教育を受けたがヘリーの学校の成績はいつも2番。だったらしい。1番ではなかった。中学に入学してすぐ1番の成績を取った時、クラス中からカンニングをした、答えを知っていたなどの言われなきパッシングを受けたそう。そんな環境に嫌気がさして回答はいつも満点にして、消しゴムで正しい答えを薄く消したり、半分消したりして採点する先生を試していた。その結果、成績1番はいつもユダヤ系で日系は2番と言うのがクラスの**暗黙のルール**。だったらしい。またある時、先生が「米国は自由で民主主義の国だ」と言ったのでヘリーは「では白人が多くインディアンを殺したのも民主主義ですか？」と質問したところ、当然のごとく無期限の自宅学習となった。家でムシヤクシヤしていた自宅学習中に成績を1番にさせていたユダヤ人の同級生が遊びに来て、ヘリーにこう言った。「君も知っているだろ、米国人(白人)には楯突かない方がよいよ」と。

物事をスムーズに行なうポジションとは

日本人から見るとユダヤ系も白人と同じに見えるが、当時の米国人から見るとやはり日本人もユダヤ人も異文化集団であつたのだろう。彼(ユダヤ人)には薄々自分が作られ

た1番であることを知っていて、そのことが気がかりでヘリーの家に行くことになつたらしい。そして翌日ヘリーは学校に行き先生に生徒として、詫びを入れる。前に、合衆国憲法前文に書かれている「われら合衆国民は、より完全な連邦を形成し、正義を樹立し……」と読んでから数日に発言したことを謝罪して先生と生徒の立場を回復することになつたそう。

そんな話を何度も今は亡きヘリーから聞いていたが、ナカムラさんの奥さんは一言、「同じなのね」。ナカムラさんのご主人はある防衛産業の技士である。スーやヘリーの時代と違い時代が進んだ3世ともなると学校で一番の成績を取っても変なイジメはなかったそう。もちろんヘリーが属していた日系人部隊442連隊、第100歩兵大隊がヨーロッパ戦線で活躍して、第二次大戦後、日系人の社会的立場が改善した事実もある。

その後ナカムラさんのご主人は就職することになり技士として活躍するが、見える、見えない米国人(白人)の圧力を感じることがあつたそう。そこで一歩身を引いて2番目のポジションから行動を起こすと物事がスムーズに行つたそう。そんな昔話をしていたスーとナカムラさん

の奥さんは、いつも1番になれる用意をしている。「2番目は大切よね」の冒頭の言葉が出てきた。ただこの話のタイム・ゾーンは今から70年以上前の米国での話である。ではあるが、もしかして日本の農業、いや今、地元長沼で起きている**リアルなこと**かもしれないよ。

そう言えば、スーパー堤防や次世代スーパー・コンピュータ開発予算などの事業仕分けで「2位じゃだめなんじゃないか？」で活躍された蓮舫参議院議員の父親は台湾の出身と聞く。たぶん日本に来てから同じようなご苦労された経験を受け継ぎ、末は博士か大臣かを地で行く、生き様は実に色っぽいではありませんか。ちなみにドラマでは主人公・天羽賢治が自分は日本人なのか米国人なのか悩み、最後にピストル自殺するシーンがあるが、実際現場で起きたのは本人が酔っ払い、MP(陸軍官憲)がやってきて騒ぎになり、MPのホルスターにあるコルト45ガバメント拳銃に触れた、触れないで奪い合いになり暴発したのが主たる原因であるということである。なぜ知っているのか？ 実はその事件現場に飲み友達のスーのご主人・ヘリーがいて、一部始終を目撃していたからだ。